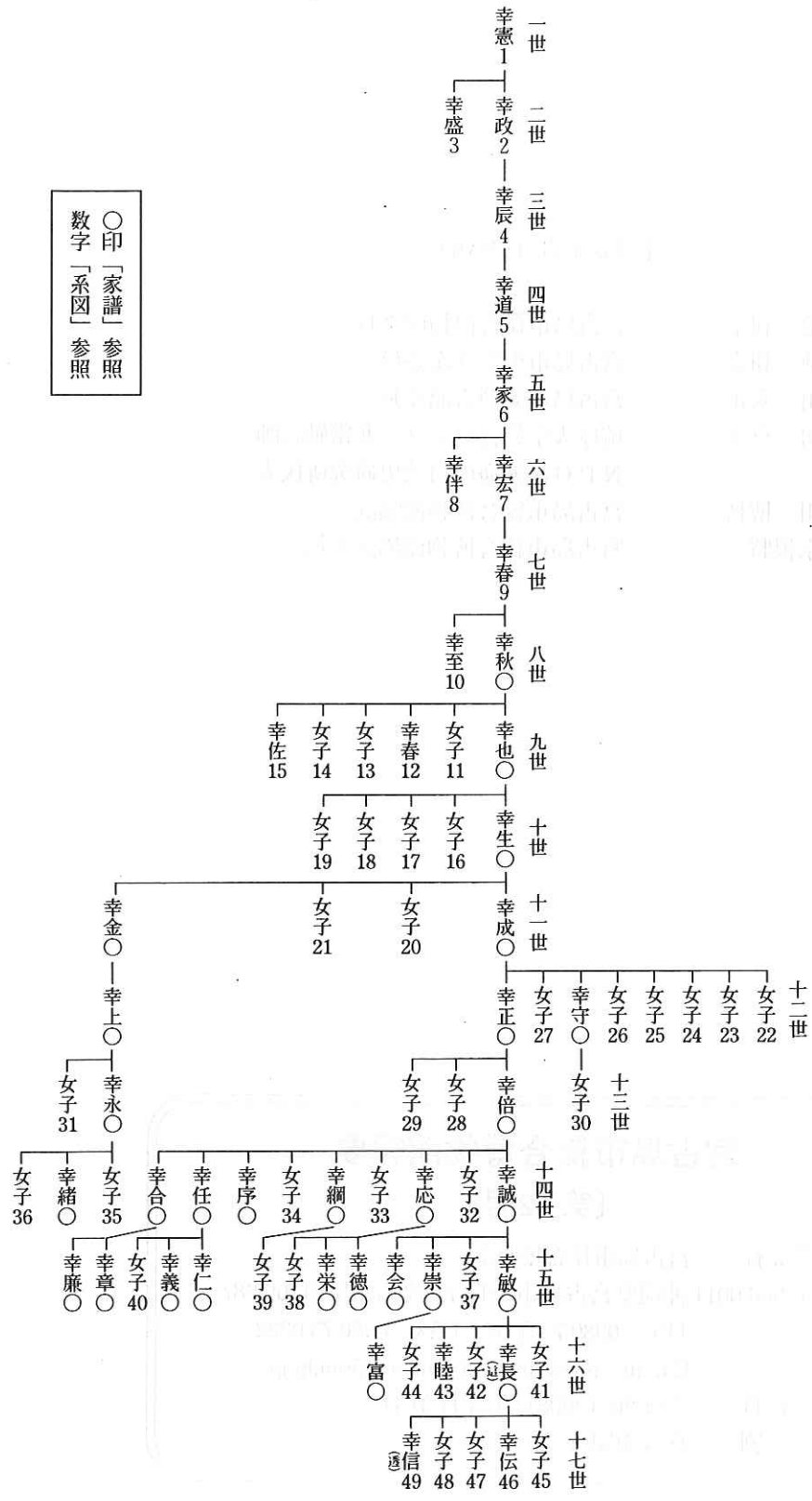


史料紹介

仲立氏正統系図家譜

博物館協議委員 仲宗根 將二

○印	「家譜」	参照
数字	「系図」	参照



〈解題〉

五十年来所在不明とされてきた「仲立氏正統系図家譜」が、このほどその正統を継ぐ平良西里出身・那覇在住・本永博一氏はじめ、親族の方々の努力によつて確認された。仲立氏は、宮古の歴史について一定の知識を持つ人なら周知の、西暦一五〇〇年前後の仲宗根豊見親のころ、二度にわたる八重山遠征や「大般若経」六百卷導入等で活躍した金志川豊見親兄弟らを祖先に持つ系統である。

現存の系図家譜は和紙五十九枚からなり、系図十七枚、家譜四十二枚、計五十九枚で構成されている。正統（本家）には当然付いているとみなされる「序」は表紙とともに欠落したようが付いていない。それゆえ折角 元祖は「友利大殿 幸憲」と明記されているのに、どのような由緒来歴を持つ家柄なのか、幸憲はどのような実績を持つ人物なのか、知ることができない。系図は十七代まで、名前と職名は付されているのに、家譜に父母・生卒、経歴が詳細にあらわれるのは八代目からで、それまでは、「年暦久遠而生卒録不詳」となっている。二代め、つまり大殿の子が、宮古史上周知の金志川兄弟であるらしいことが明記されている。

慶徳村恒任は、金志川金盛・那喜太智（津）兄弟を仲宗根豊見親の妾腹の子とみなしている（『宮古五偉人伝』一九二五年）。さらに仲宗根豊見親の「後裔は忠導氏（玄）で其の支流に宮金氏（智利真良豊見親の後裔「寛」、仲立氏（金志川那喜太智豊見親の後裔「幸」）等がある」とも記している（『宮古史伝』一九二七年）。三男の智利真良を祖とする宮金氏とともに仲立氏も仲宗根豊見親の血をひく支流として扱っている。近代に至るまで宮古ではそのような伝承があったのであろうか。

また、稲村賢敷は、日本本土渡来の造船の神として砂川・上比

屋の前ぬ屋御嶽に祀られている砂川大殿は「兄弟の叔父」であるとみなしている（『宮古島旧記並史歌集解』一九六二年）。「叔父」というからには兄弟の父母の弟ということになる。さすれば兄は友利大殿ということになる。これより先、「宮古造船技術の創始者は前ぬ屋御嶽の祭神である砂川大殿であり、大殿は日本（大和）から渡来した人であるから其の造船技術が日本伝来のものであることは明らかである」とも記している（『宮古島庶民史』一九五七年）。

金志川兄弟は前記のように、仲宗根豊見親とともに二度にわたる八重山遠征で、「アカハチらの事件」や、与那国の鬼虎らを制圧したことで知られている。兄金盛は八重山遠征の帰途、多良間で病死（一説では、仲宗根豊見親の命で土原豊見親が謀殺）『多良間村史』したとされ、また、一五二三（正徳八）年、中山から「大般若経」六百巻を導入した弟那喜多津が仲立氏を継承している（『宮古史伝』は明記している）。「宮古島庶民史」も「与那国征伐後は仲宗根豊見親は弟那喜多津を重く賞し城辺の首領として施政を委し豊見親の称号を称する事をも許した。那喜多津は亦大度量の人物であつたので仁政を施し農事を奨励し神仏を尊信して祭祀を再興したので、一般農民から古代目黒盛豊見親の再来として人望が篤かつた」が、仲宗根豊見親の死後、後を継いだ仲屋金盛によつて大嶽（野原岳）で死に追いやられたと記している。しかし系図は、幸憲については「友利大殿」「年暦久遠而父母及生卒不詳」と記し、男児二人については幸憲の子として、幸政・幸盛兄弟の名を明記しつつ、兄幸政については「金盛豊見親、年暦久遠而生卒録不詳」とし、弟幸盛については、周知の「金志川豊見親」との明記はあるが、童名那喜多津を記していないばかりか、「無後胤」となっているのである。金志川兄弟と密接に関わ

るであろう当代の支配者・仲宗根豊見親(忠導氏)への配慮から、仲立氏は兄弟の詳細な記述を避けたのであろうか。慶世村、稲村両碩学ともに「仲立氏正統系図家譜」は見えていたであろうに、この相違は他の信憑性の高いとみなされる伝承にもとづくものであろう。

すでにみてきたように、系図は「友利大殿 幸憲」に始まって十七代まで明記されているが、家譜は八代「幸秋 大浦与人」に始まっている。幸秋は「童名亀、父友利大殿幸憲七代宮国仁也幸春、母染地氏新里与人実頼女真辺計、崇禎十五(一六四二)年壬午八月十八日生、康熙十八(一六七九)年庚申七月二十日去、享年四十、号秋月」、「順治十八(一六六一)年辛丑九月八日生」、「康熙十六(一六七七)年丁巳八月十五日結片髪」、「同二十七戊辰四月七日為若文字」に始まって、康熙四十二(一七〇三)年、来間目差、同五十三年、大浦与人、雍正四(一七二六)年、塩川与人に叙任して、翌五年十月、六十七歳で死去している。号は古岳。「年歴久遠而生卒録不詳」とされた先祖の名前と職名は、一、二代はさておき、三代幸辰・宮国与人、四代幸道・友利船筑、五代幸家・仲嘉泊与人、六代幸宏・平安名目差、七代幸春・友利船筑宮国仁也とあり、いずれも例外なくいわゆる城地方に任職している。城地方―宮古島東部が、平良―宮古島西部に匹敵するほどに早くから繁栄していたという考古学の成果、あるいは伝承を示すものであろうか。

「家譜」には、八代幸秋以降三十人が記載されているが、このうち通常の叙任でなく、何らかの功績について関係文書が収録されているのは、十世幸生・宮国目差、十二世幸正・砂川仁也、十四世幸誠・本永仁也の三人である。幸生は粟二百六十石余も滞納していた仲筋村の百姓を督励して皆納させたばかりか、百六十石余

貯殺させたので「御褒美」を頂いた、幸正も塩川村の耕地の少ない百姓には開墾して分け与え、滞納分百六十石余を皆納させたことと飢饉にさいしてその救済のため尽力したことが評価されている。幸誠の場合は、疱瘡治療のため王府から派遣された二人の医師が伊良部島佐良浜沖で遭難したさい救助に尽力したことが評価されている。

一八七三(明治六)年七月、ドイツ商船ロベルトソン号が中国・福州から豪州・アデレードに向かう途中、嵐にあつて宮国沖合で遭難したとき、通訳に当たったのは、当時蔵元に出仕していた十五世内間仁屋幸敏である。しかし家譜には、父母名、童名、生年月日のほかは、咸豊元(一八五二)年「結片髪」(元服)とあるのみで、その後のことは記されていない。ロベルトソン号救助はそれより二十二年後の一八七三(明治六)年のことである。一九三六(昭和十一)年十一月のドイツ皇帝感謝記念碑(「博愛記念碑」)建立六十周年記念式典では、幸敏の功績を讃えて孫幸伝に感謝状が贈られている。内間仁屋は、「宮古政庁蔵元出仕ノ通詞タリ夙ニ漢話ニ長シタルヲ以テ乗組員救助セラル、ヤ遭難顛末ヲ明カニシ救助手續ヲ円滑ナラシメ且日夜附添ヒテ通弁ノ勞ヲトリ異国人ヲシテ憂ナカラシメ無事帰国ノ途ニ就カシメタリソノ功績洵ニ……」とある。

なお「系図」の43―49には検印はなく、「家譜」の直近の記録は同治十二(明治六)一八七二)年である。

〈付記〉本解題は、宮古郷土史研究会「会報」一五六号(二〇〇六・九・一四)に掲載した「史料紹介 仲立氏正統系図家譜」に補筆したものです。「家譜」翻刻に当たっては佐渡山正吉、下地和宏両氏の協力を得ました。記して感謝の意を表します。なお

判読困難な文字は□で記し、欠字は□としてあります。

仲立氏系図 正統

1 幸憲 友利大殿

年歴久遠而父母及生卒不詳

2 幸政 金盛豊見親

年歴久遠而生卒録不詳

3 幸盛 金志川豊見親

無後胤

4 幸辰 宮国与人

年歴久遠而生卒録不詳

5 幸道 友利船筑

年歴久遠而生卒録不詳

6 幸家 仲嘉泊与人

年歴久遠而生卒録不詳

7 幸宏 平安名目差

年歴久遠而生卒録不詳

8 幸伴 宮国目差 大味俵 下里与人為小祖

9 幸春 友利船筑 宮国目差

年歴久遠而生卒録不詳

10 幸至 宮国仁也

11 女子 喜佐良 根馬氏大味俵 西仲宗根与人定勝室

母 砂川村百姓伊計真筑女免嘉

康熙二十年辛酉五月十日生

12 幸春 長間目差 大原 水納目差為小祖

13 女子 免嘉 忠導氏下地仁也玄通妻

母 下里村百姓真佐利筑女那宇楚

康熙三十年甲戌三月二日生

14 女子 松 白川氏仲宗根仁也惠□妻

母同 姉免嘉

康熙三十五年丙子四月九日生

15 幸佐 砂川与人

16 女子 嘉那志 益茂氏阿津真々 長間与人昌保妻

母 砂川村百姓龜筑女免嘉

17 女子 嘉那志 忠導氏喜瀬仁也玄□妻

母 堀川氏下地親雲上義□女免嘉

康熙四十二年癸未八月二日生

18 女子 喜次真良 白川氏下地仁也惠□妻

母同 姉嘉那志

康熙四十八年己丑十一月二十日生

19 女子 仁喜寿 向裔氏外間 新里仁也朝拝妻

母 東仲宗根村百姓赤頭上地仁也女龜

康熙四十一年甲申二月二日生

20 女子 松 忠導氏翁長仁也玄□妻

母 蔡孫氏与那霸与人親雲上武春女免嘉

雍正四年丙午六月十日生

21 女子 免嘉

母同 姉松

雍正六年戊申五月三日生 乾隆二十四年己卯三月十八日去

行年三十二号梅岳妙相

22 女子 嘉那志

母 宮金氏砂川目差寛備女松

乾隆八年癸亥七月二十七日生 同二十年己亥正月十七日去

23 女子 免嘉

母同 姉嘉那志

乾隆十年乙丑十二月五日生

24 女子 松 忠導氏洲鎌仁也玄幸妻

母同 姉嘉那志

乾隆十三年戊辰十二月六日生

25 女子 免嘉

母同 姉嘉那志

乾隆十四年己巳十二月六日生

26 女子 龜

母同 姉嘉那志

乾隆十八年癸酉三月十九日生 同十九年甲戌六月二十八日去

27 女子 屋真

母同 姉嘉那志

乾隆二十三年戊寅九月二十四日生

28 女子 松 妾腹之女也

母 塩川村百姓赤頭塩川仁也女免嘉

乾隆五十年己巳正月五日生

29 女子 松 妾腹之女也

母 仲筋村百姓赤頭仲宗根仁也女屋真

嘉慶五年庚申八月十三日生

30 女子 松

母 忠導氏島尻仁也玄女女龜

乾隆三十三年甲子八月十五日生

31 松

母 川滿村百姓真多根女真佐利

嘉慶十四年己巳八月八日生

32 女子 免嘉

母 忠導氏耕作筆者狩俣仁也玄祥長女蒲戸

嘉慶二十四年己卯二月十八日生 道光十三年癸巳七月五日号呈

珠禪童

33 女子 松

母同 姉免嘉

道光五年乙酉五月九日生

34 女子 蒲戸

母同 姉免嘉

道光九年己丑九月三日生

35 女子 金免嘉

母 新備氏下地筑登之利喜長女龜

道光十四年甲午九月二十一日生

36 女子 蒲戸

母同 姉金免嘉

道光十九年己亥八月十九日生

37 女子 屋真

母 白川氏洲鎌与人惠寛長女免嘉

道光二十三年癸卯八月五日生

38 女子 屋真奴佐

母 毛氏豊見山親雲上安慎在番之時生産之女蒲戸

同治八年己巳十一月二十五日生

39 女子 免嘉 白川氏松川仁也惠厚室

母 白川氏宮国与人惠崇八女龜

道光三十年庚戌四月二日生

40 女子 免嘉

母 玻立氏砂川尔也泰永二女加那

同治六年丁卯二月二十五日生

41 女子 保那

母 英俊氏若文子佐久真仁也恒泰長女嘉那

咸豐十年庚申九月二十五日生

42 女子 免嘉

母 白川氏柚山筆者真壁仁也惠縁二女免嘉

同治十年辛未六月二日生

43 幸睦 屋真

光緒五己卯年十一月十九日生

44 女子 与奴志免嘉

光緒十甲申年九月六日生

45 女子 免嘉

光緒二十甲午年八月十三日生 明治二十七年

46 幸伝 嘉那

光緒二十三丁酉年十二月二十三日生 明治三十年

47 女子 屋真

光緒二十六年庚子十一月六日生 明治三十三年

48 女子 蒲戸

明治三十六年癸卯九月七日生

49 幸信 蒲

明治四拾壹年戊卯六月廿七日生

仲立氏家譜 正統

幸秋 大浦与人

童名 龜

父 友利大殿幸憲七代宮國仁也幸春

母 染地氏新里与人実頼女真辺計

崇禎十五年壬午八月十八日生

康熙十八年庚申七月二十日去 享年四十号秋月

順治十八年辛丑九月八日生

尚貞王世代

康熙十六年丁巳八月十五日結片髮

同二十七年戊辰四月七日為若文字

同三十七年戊寅為多良間島風俗見分在番筆者毛氏宜保里之子親

雲上寵賜益茂氏下地親雲上昌弘渡海之時隨從二月十三日漲水

開船到彼地公事全終歸島

同三十九年庚辰為多良間島風俗見分在番筆者喜舍場筑登之親雲

上忠導氏砂川親雲上玄信渡海之時隨從二月十六日漲水開船到

彼地公事全終歸島

同四十二年癸未八月二十六日任來間目差

尚敬王世代

康熙五十三年甲午為御用布宰領從大和船到中山公事全終歸島

同年九月二十三日任大浦与人

同五十七年戊戌十月十七日叙筑登之座敷

雍正四年丙午任塩川与人

同五年丁未十月五日去 享年六十七号古岳

幸也 嘉手苜筑登之親雲上

童名 武佐

父 幸憲八代大浦与人幸秋

母 砂川村伊計真筑女免嘉

康熙元年壬寅十月五日生同二十三年甲子八月二十九日去 享

年三十五号古峰

康熙十七年戊午二月十一日生

尚貞王世代

康熙三十三年甲戌七月七日結片髮

尚敬王世代

康熙五十六年丁酉七月七日為若文字

雍正四年丙午九月四日任砂川目差

同九年辛亥為地船馬艦格作事役到八重山島公事全終歸島

同年九月十七日為嘉手苜与人

乾隆四年己未九月二十九日黃冠添而為橫目

同九年甲子八月十六日去 享年六十七号徹心道機

幸生 宮国目差

童名 蒲戸

父 幸憲九代嘉手苜筑登之親雲上幸也

母 堀川氏下地親雲上義女免嘉

康熙十四年乙卯九月三日生

乾隆元年丙辰二月九日去 享年六十二号通広

康熙十九年庚辰二月十日生

尚敬王世代

康熙五十六年丁酉八月十五日結片髮

乾隆元年丙辰三月二十五日為假若文字

同七年壬戌正月二十三日為若文字

同年十二月十二日為袖山筆者

同九年甲子於八重山島為諸木種子積越用白川氏下里与人惠端隨

從到彼島公事全終歸島

同十四年己巳九月二十八日任大浦目差

尚穆王世代

乾隆二十年乙亥九月二十四日叙筑登之座敷

同二十一年丙子九月二十八日任多良間目差

同二十三年戊寅九月六日任宮国目差

同二十五年庚辰御褒書左記

仲筋村百姓中前々より之未進穀去ル丑年取立粟式百六拾石余有之候処段々下知方宜相働寅卯每年致皆納其上粟百六石余内貯仕置候由在番頭申越有之役務之詮相立殊勝之儀候間猶以出精致勤務候様御評定所より御書付を以御褒美被成下候事

同年貢物為宰領從仲立船到中山公事全終歸島

同年十一月二十四日去 享年六十一号富山宗栄

幸成 伊良部目差

童名 蒲戸

父 幸憲十代宮国目差幸生

母 蔡孫氏与那霸親雲上武春女免嘉

康熙三十五年丙子十月二十三日生乾隆十四年己巳六月十九日

去 享年五十四号慈原

康熙五十九年庚子十月十日生

尚敬王世代

雍正十三年乙卯八月九日結片髮

乾隆十三年戊辰十一月朔日為袖山假筆者

尚穆王世代

乾隆十八年癸酉十二月十八日為長間村袖山筆者

同四十七年壬寅九月十一日任水納目差

同四十九年甲辰九月十三日任伊良部目差

同五十年己巳七月三十日去 行年六十六号元心宗達

幸金 平良仁屋

童名 武佐

父同 兄幸成

母 益茂氏前石伊良部首里大屋子昌本四女松

雍正三年乙巳九月七日生

不録年号月日不詳

乾隆十九年甲戌五月十三日生

尚穆王世代

乾隆三十三年戊子六月二十七日結片髮

不録年号月日不詳

幸守 新城仁也

童名 武佐

父 幸憲十一代伊良部目差幸成

母 宮金氏大原砂川目差寬備女松

康熙五十九年庚子六月七日生 乾隆二十九年甲午三月十日去

号栢庭妙節

乾隆二十一年丙子六月二十日生

尚穆王世代

乾隆三十五年庚寅八月九日結片髮

嘉慶二十一年丙子九月十四日去 号実心宗悟

幸正 砂川仁也

童名 蒲戸

父母同 兄幸守

乾隆二十九年甲申正月八日生

尚穆王世代

乾隆四十三年戊戌十二月二十八日結片髮

同五十八年癸丑十月十一日為池間村耕作假筆者

尚温王世代

嘉慶四年己未二月朔日為塩川村耕作筆者

同年仲筋塩川両村未進補助之胡麻為宰領宮古島罷登公事全終歸

島

同五年庚申仲筋塩川水納三箇村切支丹改帳及定納布為宰領從四

端帆船宮古島罷登公事全終歸島

同年仲筋塩川水納三箇村定納布為宰領從馬船宮古島罷登公事全

終歸島

同年多良間島用船為所望從押舟宮古島罷登公事全終歸島

同年十一月十一日為來間村耕作假筆者

同六年辛酉十一月十一日為長間村耕作筆者

砂川尔や

右者塩川村耕作假筆者之時多良間島之内塩川村上納未進太分有

之冠船御申請御手当二付而兼而順々申渡趣有之候処定式之筆者

迨二而八下知方届兼加勢人共相附四年差分ケ地方持不足共江者

開地を以分々相渡怠居候者共八右面々二而作場江列出為相耕与

人目差江は仕口之善悪差引為相働候付年貢相納候上百六拾七石

余未進之方江相納候由暖役人申出在番頭次書を以申越趣遂披露

候処殊勝之至被思召上候以後役願之砌其切可被見合旨御差図二

而候以上

□九月

大山親雲上

御物奉行

尚成王世代

嘉慶九年甲子十一月朔日為塩川村耕作筆者

尚瀬王世代

嘉慶十年乙丑多良間島定納布為宰領從四翁船宮古島罷登公事全
終歸島

同十一年丙寅十一月朔日為荷川取村耕作筆者

同十二年丁卯多良間島切支丹宗門改帳為宰領宮古島罷登公事全
終歸島

同十四年己巳十月二十日為塩川村耕作筆者

同十五年殘御用布並御物穀為宰領宮古島罷登公事全終歸島

同十六年辛未切支丹宗門改帳為宰領二月十八日宮古島江罷登公
事全終歸島

嘉慶十七年壬申切支丹宗門改帳為宰領從四端帆船正月二十八日

宮古島罷登首尾能相勤三月七日歸島

同上年上納布並諸帳為宰領從四端帆船四月二十二日宮古島江罷登
首尾能相勤五月八日歸島

同年十月六日為島尻村耕作筆者

同十八年癸酉八月二十七日為來間目指

同十九年甲戌御物穀並諸御用布諸御用物為宰領從春立船到テ中
山公事全終歸島

同二十三年戊寅八月十九日筑登之座敷頂戴

同年諸御用布及諸御用物為宰領後立足馬艦ヨリ上国首尾能相勤
歸島

嘉慶二十四年己卯多良間風俗見分及百姓為面引合藏筆者足從馬
艦罷渡首尾能相勤歸島

道光四年甲申出物御用布為宰領早船馬艦ヨリ上国首尾能相勤歸
島

同五年甲申八月十七日為東仲宗根与人

同五年乙酉八月二十九日黃八卷頂戴

同七年丁亥三月朔日銅板齊一端拜領之

右者御当地之儀去ル申秋より翌西春迄飢饉ニ而未々至而及困
窮御救方被仰付候得共御物連茂不相統所より穀物才覺飛船候
被差渡候処一渥御奉公之儀旨存各応賤力穀物借上殊勝之至御
座候間為御褒美右通被成下候事

亥三月朔日

道光十二年壬辰六月二十三日去 号義覺宗真

幸上 平良仁也

童名 蒲戸

父 幸憲十一代平良仁也幸金

母 根馬氏下里仁也定欠女龜

乾隆二十三年戊寅十二月二十九日生 不録年号月日不詳

乾隆五十一年丙午八月十六日生

尚温王世代

嘉慶五年庚申正月元日結片髮

不録年号月日不詳

幸倍 平良仁也

童名 蒲戸

父 幸憲十二代砂川仁也幸正

母 忠導氏下地仁也玄欠女保那

乾隆三十二年丁亥七月十六日生咸豐三年癸丑九月二十日去

号寿山妙衆

乾隆五十八年癸丑八月十七日生

尚瀬王世代

嘉慶十二年丁卯八月三日結片髮

同二十四年己卯十月十日為假若文字

道光七年丁亥御國許飢饉ニ付古米早積登候様御間合被仰下候ニ
付御物穀為幸領久高船ヨリ上国首尾能相勤歸島

同八年戊子四月二十三日為若文字

同九年己丑切支丹改帳為幸領從早船馬艦上国首尾能相勤歸島

同十一年辛卯多良間島為手札改頭名代狩俣首里大屋子江相附久

高船ヨリ罷渡首尾能相勤歸島

尚育王世代

道光十五年乙未七月二十二日為狩俣目差

道光十五年乙未七月二十二日赤八卷頂戴

同二十年辛子御物穀並諸御用布諸御用物為幸領從後立足馬艦上

国首尾能相勤歸島

同二十一年辛丑八月十六日為西仲宗根与人

同二十二年癸寅十二月四日去 号廓山惠然

幸永 平良仁也

童名 蒲戸

父 幸憲十二代平良仁也幸上

母 川満村百姓真多根女真佐利

乾隆三十八年癸巳三月五日生

嘉慶十年乙丑二月十三日生

尚瀬王世代

道光元年辛巳七月二十日結片髮

不録年号月日不詳

幸誠 本永仁屋

童名 蒲戸

父 幸憲十三代平良仁也幸倍

母 忠導氏耕作筆者狩俣仁也玄祥長女蒲戸

嘉慶元年丙辰九月二十八日生

嘉慶二十一年丙子十一月二十二日生

尚育王世代

道光十一年辛卯二月三日結片髮

同十一年辛卯九月二十二日池間村為耕作假

筆者

同十五年乙未十月朔日与那覇村為耕作筆者

同十八年戊戌三月十八日前里村袖山筆者

覚

前里村耕作假筆者

本永仁屋

右者去々年痲瘡医者具志筑登之親雲上与那城筑登之親雲上下島
之砌洋中及難船伊良部島之内佐那浜之浦江致沖掛候処風波強殊
二荒場二而漸々干瀬江走揚及危躰二夜中故所之様子茂不相分船
中人数至極及驚動候処各筆者勢番所詰居候砌難船之様子見及早
速船名子召集風波を不悚組船を以船本漕参候付いつれ茂危難を
凌致陸卸追而本船致破船候得共乗組人数尙人茂怪我無之畢竟右
面々取計故全致助命候間似合之御褒美被仰付度旨具志堅与那城
書付ニ在番頭次書を以申越之趣有之遂披露候処殊勝之儀被思召
候至以後右躰之節ハ随分出精可相働旨右面々江可被申渡二而御
差図候以上

但右人数之内以後何歟之働有之節ハ此書付取添申出候様可被

申渡候

九月十五日

勝連親雲上

伊志嶺親雲上

御物奉行所

右通被仰渡候間此旨可被申渡候以上

九月

豐見山親雲上

富島親方

宮古島

在番

覚

宮古島前里村柚山筆者

本永仁屋

右者宮古島仲立地船去年九月廿五日那霸川致出帆候処翌日より向風相成漸々乘行伊良部島之内佐那浜六七里程迄乗寄候得共不順之風二而取着候様不被成何方迄乘行旨乗組人数至極及驚動候処本永佐那浜江詰居候砌二而右之様子見届早速池間前里兩村より届分之方舟伝間四棚舟等差出大地方江茂間合差遣挽舟差出させ漸漲水泊江為挽入由畢竟本永取計二依全ク島元取着致助命御用筋等首尾能相届候間似合之御取持被仰付度旨其時之乗合役々書付二在番頭次書を以申越趣有之遂被露候処殊勝之儀二被思召候至以後茂右様之節者随分出精相働旨右本永江可被申渡候此段御差函二而候以上

但右本永以後何歟之働有之候節者以此書付取添申出候様可被

申渡候

亥閏八月廿日

松堂親雲上

恩河親雲上

御物奉行所

右通被仰渡候間此段可被申渡候以上

亥閏八月

与那原親方

嘉手納親方

宮古島在番頭

咸豐二年壬子十一月十日去 号渡海良休

幸孝[㊦] 添石仁也

童名 蒲戸

父母同 兄幸誠

道光元年辛巳二月二十日生

尚育王世代

道光十一年辛卯八月二十日結片髮

幸綱 砂川尔也

童名 坊

父母同 兄幸誠

道光七年丁亥八月十七日生

尚育王世代

道光二十年庚子十二月二十五日結片髮

幸序

童名 蒲

父母同 兄幸誠

道光十二年壬辰十月二十三日生

同十三年二十四年甲辰三月十五日 号花顔良香

幸任 下地尔也

童名 蒲戸

父母同 兄幸誠

道光十二年壬辰十月二十三日生

尚育王世代

道光二十六年丙午閏五月八日結片髮

幸合 平良仁也

童名 蒲戸

父母同 兄幸誠

道光十六年丙申六月九日生

尚育王世代

道光二十八年戊申六月九日結片髮

幸緒 伊波仁也

童名 武佐

父 幸憲十三代平良尔也幸永

母 新備氏下地筑登之長女龜

嘉慶十五年庚午十二月十日生

不録年号月日不詳

道光十七年丁酉正月四日生

幸敏 内間仁也

童名 蒲戸

父 幸憲十四代本永仁屋幸誠

母 白川氏洲鎌与人惠寛長女免嘉

嘉慶二十一年丙子正月十三日生

咸豐三年癸丑二月十一日去 号慈眼妙恵

道光十九年己亥八月八日生

尚泰王世代

咸豐元年辛亥二月二十五日結片髮

幸崇 平良仁也

童名 屋真

父母同 兄幸敏

道光二十六年丙午九月九日生

尚泰王世代

咸豐八年戊午九月九日結片髮

同治九年庚午七月二十六日去 号唯心宗悟

幸會 本永仁也

童名 蒲戸金

父母同 兄幸敏

道光三十年庚戌五月二十九日生

尚泰王世代

咸豐十二年壬戌九月十三日結片髮

幸徳 平良仁也

童名 屋真

父 幸憲十四代添石仁也幸応

母 英俊氏柚山筆者平良仁也恒治三女屋真

道光三年癸未七月十二日生

同治五年丙寅七月十八日去 号貞室妙和

道光二十九年己酉正月二十八日生

尚泰王世代

咸豐九年戊未二月二十八日結片髮

幸榮 砂川仁也

童名 屋真

父母同 兄幸徳

道光三十年庚戌十二月二十三日生

尚泰王世代

咸豐十一年戊戌十二月二十三日結片髮

幸仁 宮平仁也

童名 蒲戸金

父 幸憲十四代下地尔也幸任

母 玻立氏砂川尔也泰永二女嘉那

道光十五年丁未九月十二日生

咸豐七年丁巳三月十日生

尚泰王世代

同治八年己巳十一月十六日結片髮

幸義 砂川仁也

童名 蒲

父母同 兄幸仁

咸豐十一年辛酉十二月朔日生

尚泰王世代

同治十二年癸酉十一月二十三日結片髮

幸章 与那原仁也

童名 屋真

父 幸憲十四代平良仁也幸合

母 土原氏佐和田仁也春茂長女蒲戸

道光十六年丙申七月二十七日生

咸豐十年庚申二月二十日生

尚泰王世代

同治九年庚午十一月二十一日結片髮

幸廉

童名 蒲戸

父母同 兄幸章

同治五年丙寅正月二十六日生

幸這

童名 蒲

父 幸憲十五代内間仁也幸敏

母 白川氏柚山筆者真壁仁也惠緑二女免嘉

道光十五年己巳八月二十四日生

同治七年戊辰三月二十七日生

幸富

童名 屋真

父 幸憲十五代平良仁也幸榮

母 白川氏比嘉与人惠義二女亀

道光二十三年癸卯閏七月二十八日生

同治七年戊辰二月二十四日生

(なかそねまさじ)